

恥骨悪性骨腫瘍術後の大量発汗に対し 補中益気湯が有効であった一症例



池田 和世 先生

大阪国際がんセンター 心療・緩和科/緩和ケアセンター

1995年 産業医科大学医学部 卒業
1995年 国立小倉病院 麻酔科(現 国立病院機構
小倉医療センター)
1996年 大阪労災病院 麻酔科
1998年 大阪市立大学(現 大阪公立大学) 医学部
附属病院 麻酔科
1999年 産業医科大学病院 麻酔科

1999年 大阪労災病院 麻酔科
2007年 兵庫医科大学病院 ペインクリニック部
2014年 関西労災病院 緩和ケア科
2019年 大阪国際がんセンター 心療・緩和科/
緩和ケアセンター

はじめに

がん患者に対し、補中益気湯や十全大補湯、人参養栄湯などの補剤を使用する機会は多い。

本講演では術後～終末期のがん患者の大量発汗に対し補中益気湯が有効であった症例を検討する。

症 例

症 例：58歳 男性。

主 訴：大量発汗、発熱、出血、下痢。

現病歴：右恥骨悪性腫瘍に対し、X-1年11月17日に右骨盤半截術が施行された。切断部の創痛やがん性疼痛、右下肢の幻肢痛が改善しないために緩和ケアチームの介入となった。オピオイドや鎮痛補助薬、リハビリテーションにより痛みは改善した。しかし、創部感染を起こし、X-1年12月に創部が離開した。多発肝転移と胸骨転移も出現し、Best supportive careとなった。

X-1年末より創部感染による発熱と発汗、創部出血、滲出液漏出が出現し、連日、主治医からNSAIDsや抗生剤、止瀉薬が投与されたが症状は改善しなかった。オピオイドの服用で便秘であったが、次第に下痢傾向になってきた。症状の改善はみられず、X年1月7日より漢方薬による治療を開始した(図1)。

現 症：血液検査所見では、貧血の進行と肝機能障害、炎症所見がみられた。

本人から「痛みはないけれども、汗と下痢で寝間着を1日2回も替えてもらわないといけません。熱も出て、し

んどくて食欲もありません」とのご発言があった。1週間後に在宅医介入のもとで、自宅退院の予定だったが、術後は着替え、排泄処理、ガーゼ交換などがご自身のみではできないため、退院後の生活に非常に不安をお持ちであった(図1)。

臨床経過：升提作用のある補中益気湯7.5g/日(分3)を開始したところ、初回の服用後より発汗と発熱が改善傾向と

図1 症例 58歳 男性

主 訴

大量発汗、発熱、出血、下痢。

身体所見

身長 180cm、体重 65kg(入院時)

現病歴

- 右恥骨悪性腫瘍に対しX-1年11月17日に右骨盤半截術施行。
- 切断部の創痛、がん性疼痛、右下肢幻肢痛が改善しないため緩和ケアチーム介入となった。

- オピオイド、鎮痛補助薬、リハビリテーション等により痛みは改善。
- 創部感染によりX-1年12月に創部離開。多発肝転移、胸骨転移が出現し、Best supportive careとなった。

- X-1年末より創部感染による発熱と発汗、創部出血、滲出液漏出が出現。連日NSAIDs、抗生剤、止瀉薬が投与されたが症状は改善しなかった。
- オピオイドの服用により便秘であったが、次第に下痢傾向になってきた。

- 症状の改善がみられず、X年1月7日より漢方薬による治療を開始した。

現 症 (X年1月7日)

- HGB 9.0g/dL ↓、HCT 29.3g/dL ↓、AST 60U/L ↑、ALT 62U/L、CRP 22.37mg/dL ↑
- 「痛みはないけれども、汗と下痢で寝間着を1日2回も替えてもらわないといけません。熱も出てしんどくて食欲もありません」
- 術後は着替え、排泄処理、ガーゼ交換などがご自身のみではできず、退院後の生活に大変な不安をお持ちであった。

なった。2日後(X年1月9日)にはほぼ平熱となり、発汗や出血、下痢が改善した。浸出液の量も減少し、ガーゼ交換は2~3回/日から1回/日ですむようになった。

1週間後(X年1月13日)に、「汗が止まってよかったです。元気も出てきました」と大変喜ばれ、在宅医介入のもと自宅に退院となった(図2)。

東洋医学的所見(X年1月7日)：図3に示す。

病因病機：感染・出血による消耗から肺気虚となり、衛気不足から気を留めることができずに発汗が起こり、脾気虚から下痢が起こり、脾不統血から出血が起こった。脾気虚から食欲不振が起こった。また、急激な陰液の喪失により陰火内盛となり発熱が起こったと考えた(図4)。

考察

補中益気湯は、脾胃気虚による中気下陷、脾不統血、発熱の症状を甘温の生薬で補気健脾、除熱し、升麻で升陽挙陷する方剤である。

本症例では脾胃気虚による食欲不振、脾不統血による出血、中気下陷による下痢、衛気不足による自汗、陰火内盛による発熱の症状が補中益気湯を服用することにより速やかに改善し、本方剤が有効であったと考えられた。

まとめ

手術後や化学療法治療中のがん患者は、気血ともに消耗している場合が多く、補剤の適応となる患者も多いと考えられる。

Discussion

木村：補中益気湯によって発汗症状が改善した症例をご提示いただきましたが、汗の治療では桂枝加竜骨牡蛎湯との鑑別も考える必要があると思います。

池田：本症例は気虚がベースとなっていると考えているので、竜骨・牡蛎よりも黄耆・柴胡・升麻が配合されている補中益気湯の適用と考えました。

木村：がん患者さんにおける補剤の鑑別について教えてください。

池田：がん患者さんは貧血を呈している方も多いため、貧血の程度が強い方には人参養栄湯や十全大補湯などを使います。また、食欲不振がメインの方には六君子湯などを使うことがあります。

図2 臨床経過

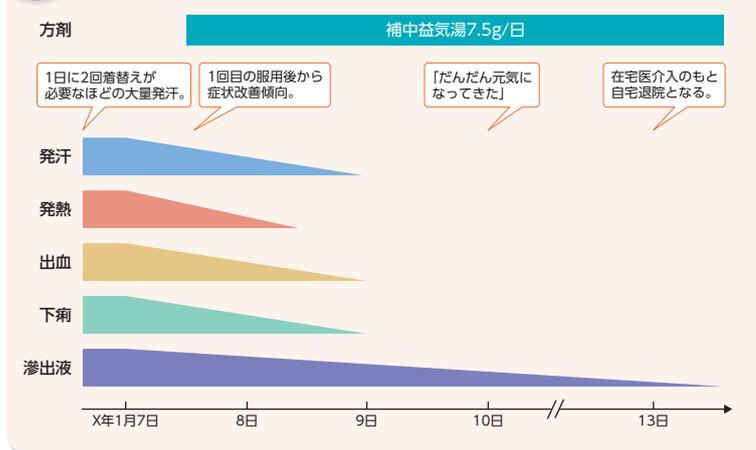


図3 東洋医学的所見

(X年1月7日)
舌診：暗赤、黒～灰色舌苔。
脈診：右細、左やや弦。
腹診：腹力3/5、腹直筋攣急(+)、胸脇苦満(+)、心下痞硬(+)、臍上悸(-)、臍傍圧痛(-)、小腹不仁(+)

図4 病因病機

